

館報 はた



平成26年9月1日現在

世帯数	5,862戸
人口	15,690人
男	7,606人
女	8,084人

「まちづくり祭」の 「まじり祭り」

7月26日に扇子田運動公園で波田さいさい祭が開催されました。

今年の夏祭りも盛況で、波田小学校吹奏楽部の演奏や波田地区子ども会育成会のふれあい動物広場、ビンゴゲームが人気でした。また、スイカの試食コーナーも好評で目的をそこに絞って来場するお客さんもある程でした。

近年出店している自然エネルギーコンテストのブースも子どもたちに人気で、雨どいを流れ落ちる水の流れて逆らって上流に昇っていく羽車に「どうして昇るの?」「不思議だね」など、親子の会話が聞こえてきていました。

露店や波田商工会の出店は相も変わらずの人気コーナーですが、アリーナ隣の芝生の上では今年初参加の波田まちあかり会が波田地区子ども会育成会と共同でスイカランタンづくりを開催していました。大勢の親子連れが熱心に取り組む姿

が見られました。今年は力作も多く、切り抜いた皮を角や耳のように飾り付けたものもありました。

夕暮れ、スイカランタンの中にはろうそくが灯され、竹製の灯籠と共に、花火終了後、帰宅する皆さんの足元を照らしていました。

かつては商工会が主催し、やがては



自然エネルギーコンテストのブースで遊ぶ子どもたち

パトロールの町会長の皆さん

「波田まちづくり協議会」が発足して夏まつりに変化があったのか取材するつもりでしたが、よく調べてみると「波田さいさい祭」のスタッフは「波田まちづくり協議会」の皆さんで構成されていたのでした。この夏まつりは、まさに「波田まちづくり協議会」を象徴するイベントでした。

わが波田地区では年間を通じていろいろな行事、イベントが開催されますが、私たち住民ひとりひとりが積極的に参加、協力していくことで「まちづくり」に参加できると思います。これからもみんなで協力しあってまちづくりをしましょう。

ささい祭実行委員会の皆さん、今年もお疲れ様でした。



ぼんび 盆火

去る8月13日・16日、4区町会で伝統行事の盆火が行われました。迎え盆・送り盆の2日間、薄暗くなった夕方から、棒状に束ねた藁6本を三角錐形に組上げた小盆火を数十基、木を芯にして組上げた中盆火・大盆火数基を、町会内を通る和堰にひとつひとつ流します。高さ70センチほどの小盆火が火を灯しながら静かに川面を流れていく光景には風情を感じます。

一方、大人の身長ほどの中盆火・大盆火が燃えながら流れる姿には、過去から続いていた伝統の風格すら漂っています。盆火の歴史は長く、御年90を超える4区町会内の長老の方にお聞きしたところでは、徳川時代には既に行われていたと言ひ伝えられています。和堰堰それ自身の古い歴史も考え合わせると、感慨深いものがあります。戦時中の灯火管制下でさえ、時間を明らいつつ時間帯に移して火の付いた盆火を流したそうです。

平成に入り、波田で下水道敷設工事が盛んに行われていた頃、盆火が行われる区域の



また、最近では、13日に町会の夏祭りが開催され、賑わいを見せています。時の流れとともに少しずつ姿を変えながらも、4区町会の子供の大切な行事として、いつまでも続いていく欲しいものです。

工事時期がお盆と重なり、行政の指導もあって盆火が中止になってしまいう年もありました。しかし、歴史と先人達の想いを知る時、伝統の重みと、絶やすことなく継続していく意義を強く感じます。現在、保存会と小学校PTAの大人が中心となって盆火を実施していますが、かつては、小・中学校の男子が、選ばれた「大将」の陣頭指揮の下、子供だけで行っていました。コンクリートによる和堰の改良工事前、両岸を藁で囲まれた緩やかな水の流れの中に入り大盆火の舵をとる大将の姿は、下級生の憧れだったそうです。改良工事後、橋の上から盆火を落とす現在の様式になりましたが、葦に替わって堰沿いに飾られた提灯が彩りを添えています。

水神社の由来について

6区の近くに、水神社という名前のお宮があります。この水神社について地域の諸先輩に話を聞いた事をもとに紹介したいと思います。

水神社は、明治15年に建てられたお宮で、地元では水神社と呼ばれ親しまれています。

今から約150年以前の下波多村(現、中・下波田)は水による僅かな水田しかなく、作物の主体は、粟、稗、麦等で、収穫も極めて低く上納する年貢は難儀を極めていました。

この窮状を救うため、庄屋の波多腰六左が、曾祖父以来の悲願を実現すべく血の滲む努力を積み重ね悪戦苦闘の末、梓川より引水し、明治15年に全工事が完了、波田堰が完成しました。これにより飛躍的に開田が進みました。

新堰の無事と開田の豊穡を祈念して、奈良県吉野郡丹生川上神社から水の神様である罔象女神を勧請して水神社殿を建てられました。

社殿は、前宮と拝殿が一体となった珍しい造りで、拝殿には廻り舞台が設けられ、そ

の両側には中2階があり、役者が梯子段を降りてくるようになっていました。

廻り舞台は床下に太い棒が十文字にあり、4人で押して廻す仕組みになっていたようです。

昭和50年代雨漏りがひどく、大修理した際に廻り舞台は取り壊されてしまいました。

廻り舞台のあったお宮は水神社の他には松本平に無いように、今は見ることが出来なくて誠に残念です。

社殿が建てられた秋には、この廻り舞台で奉納芝居、境内で、東京相撲の浦風一行を招き、奉納相撲が盛大に執り行われたようで、現在も土俵の跡が残っています。

聞くところによると、昭和30年代頃までは毎年5月15日に例大祭が行われ、露店が並び、地域の方による奉納相撲大会では、子どもたちが多く集まりにぎやかであったようです。

また、社殿内には「流濕」(訳「ながれうるおす」と書かれた奉納額が掲げられています。

社殿横には半僧坊大権現(別名「カラス天狗」という水難防止の祠が奉られていま



白熱！ソフトバレー

平成26年7月6日、波田地区のソフトバレーボール大会が行われました。種目は男女混合と女子の2種目で、それぞれ波田体育館と波田中学校の体育館で、各町会から混合19チーム、女子15チームが参加して熱戦が繰り広げられました。また、各町会の仲間や役員、家族も駆けつけ応援も熱がこもっていました。

今大会は大勢の人がソフトバレーボールに気軽に参加し、親睦を深めることを目的のひとつにするとの意向で、少しルールも緩くなっていました。

具体的には、ゼッケンの着用が必須ではないことや、サーブの順番については参加チームに任せるといったことなどです。なるべく多くの人が気軽に参加できるようにするため、基本的なルール以外は少し緩くするのも一つの方法としていいことではないで

しょうか。

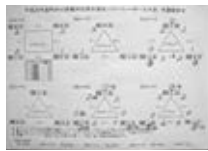
昔やっていた人も、現役に近い人も、立派な体格になっってしまった人も、ほとんど慣れていない人も一緒にあって夢中でプレーしているのは、見ている方も楽しいものでした。

現在も本格的な堅いボールを使用して9人制のバレーボールが行われていますが、町会によって実力差が大きくと、人集めに苦労する町会もあると聞いています。その点、ソフトバレーボールは4人制であって、堅いボールよりはレシーブ出来る確率も高いようで、楽しくプレーするという事では、以前よりも参加者を集め易いようです。

物足りなさを感じる実力者もいるかもしれませんが、参加者が増えるべく多い方がやりがいもあるのではないのでしょうか。

なお、大会の結果は混合の部の優勝は26区、準優勝6区、3位19区・27区、女子の部の優勝は20区、準優勝3区、3位9区・19区でした。

選手をはじめ、役員、運営スタッフ、応援や見学の方も皆様お疲れ様でした。(H・F)



まさかここにこんな歴史ありとは！
先日波田公民館講座で「波田の地名のいわれを知ろう」というテーマの講座を受講させていただきました。今まで知らなかった身近な波田の歴史や地名のいわれを学ばせていただきました。その中でも、古くは1200年前に渡来系の秦氏が中央より遣わされて朝廷の牧(牧場)を営んでいた事からこの地が「はた」と呼ばれるようになったとする説が有力だそうで、思わず当時の梓川周辺を駆けめぐる馬群がイメージされ、頭の中は中世の波田の妄想がグルグル。秦氏といえば中国の王朝、秦の末裔ともいわれる氏族である事から、波田の歴史が遠く中国大陸のそれとも繋がっていると考え、壮大な歴史ロマンが展開されて興味は尽きそうにありません。こんな素敵な話を聞かせていただき講師の百瀬さんには感謝感謝！旧松本市街地よりここスイカの平原地区に住まわせていただき、早20年。この地もかつては田んぼの水路に平家ホタルが乱舞し、子どもを連れて団扇片手に螢狩りに行ったものでした。変わりつつあるこのスイカ畑も、実は江戸時代に今でいう刑務所があったなんて歴史、知ってますか？